Press Release　2022.03.21

篠田桃紅展

Toko Shinoda: a retrospective

《熱望》2001 年、公益財団法人
岐阜現代美術財団蔵

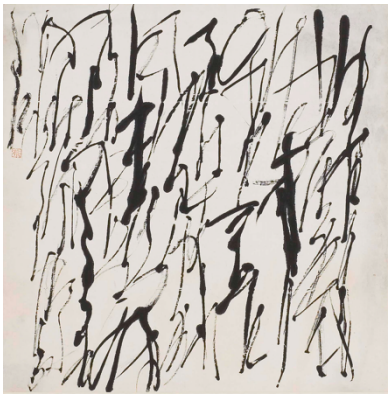
107 歳で逝去した巨星、篠田桃紅。知られているようで知られていない仕事の全貌を総数約 130 点の作品・資料で大回顧。

篠田桃紅は、70 年を越える活動を通して、前衛書から墨による独自の抽象表現の領域を拓き、孤高の位置をまもりながら探究しつづけました。中国大連に生まれ、東京で育った篠田は、自立した生き方を求めて書の世界に身を投じ、戦後まもなく、40 歳を越えて単身ニューヨークに渡り活動の場を大きく拡げます。新しい表現を求める熱気あふれるこの時代、欧米の抽象芸術と日本の前衛書が時代の先端で響きあうなか、篠田の表現は大きな注目と高い評価を獲得したのです。帰国後は、書と絵画、文字と形象という二分法に囚われない、墨によるまったく新しい独自の抽象表現、空間表現を確立し、ときに建築的なスケールにまで及ぶ制作によって、他の追随を許さない位置を占めました。篠田はまた、版画の世界でも固有の表現を確立し、さらに豊かな教養と細やかな感性、そして怜悧な批判精神に裏打ちされたエッセイの名手としても、広く人々から愛されました。惜しくも 107 歳で逝去した作家の没後 1 年を経て開催される本展は、桃紅の長きにわたる活動の全貌を約 130 点の作品・資料により紹介するとともに、その広い射程と現代性を今日的な視座から検証するものです。

内容構成（仮）

１．初期作品
文字の約束から離れ、自由な「かたち」の創出に向かったプロセスを検証

書家として出発した桃紅は、文字に自分なりの「宇宙」を感じ取ることで、空間と時間、運動を構築する独自の能力を獲得していきました。徹底して文字と向き合うことで、逆に文字の制約から離れ、自由な冒険に乗り出すことができたのです。



《墨》1955、鍋屋バイテック会社蔵

《習作》1954、鍋屋バイテック会社蔵

２．抽象表現の確立
強く、骨太な造形へ

1956-58 年の渡米を経て、桃紅は、張りのある太い線や面の構成による純粋な抽象表現に到達します。桃紅ならではの、強く、骨太な造形が、ここで確立されるのです。

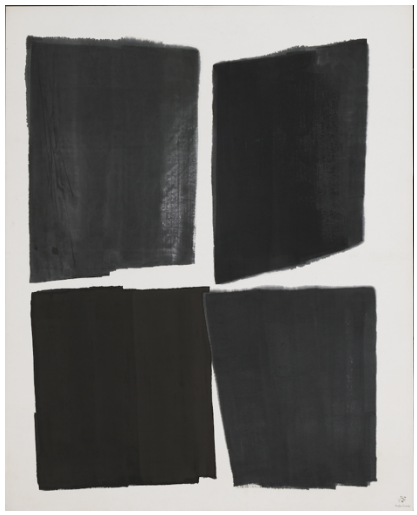
《明皎》1960 年代、鍋屋バイテック会社蔵

《遠つ代》1964 頃、岐阜県美術館蔵

3. 表現の深化
連作をとおして

抽象表現は、自由なようでいて、内的な制約はかえって強いと桃紅はのべています。さもなくば抽象は、単なる無秩序か空疎な形式に堕することに桃紅は気づいていたのです。桃紅の制作が、造形上のひとつのモチーフを徹底して探求する連作のかたちを取ったのも、そうした厳しい意識の表れかもしれません。1970 年代以降の、代表的な連作から重要作を紹介します。

《祭り(後)》1986、岐阜県美術館蔵

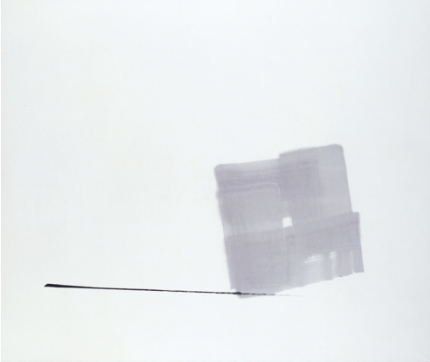


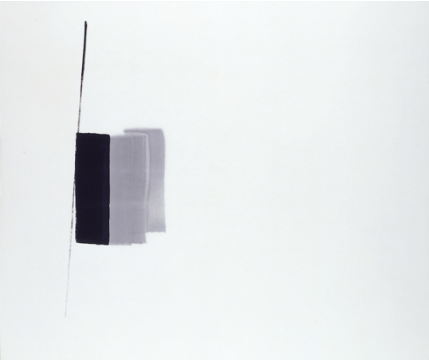
《私記》1988、公益財団法人岐阜現代美術財団蔵

4．空間との対話
諸芸術の総合と建築関係のしごと

1950～60 年代は、芸術のさまざまなジャンルを総合して、人間が生きる条件や環境を作り替えていく試みが盛んに行われました。そうしたなか、桃紅は建築とのコラボレーションに積極的に取り組み、壁書、壁画、襖絵、レリーフ、緞帳などを手掛けていきます。

《惜墨２》1991、岐阜県美術館蔵


《惜墨４》1991、岐阜県美術館蔵


《惜墨３》1991、岐阜県美術館蔵

《惜墨１》1991、岐阜県美術館蔵

5．晩年の到達点　感性的体験の豊かさへ

桃紅は、身近な自然や日々のくらしの森羅万象に感覚を研ぎ澄まして向き合い、それを制作の糧として、晩年にいたるまで、充実した制作をつづけました。桃紅は、自らの作品を「こころのかたち」と呼ぶのを好みましたが、ここにいう「こころ」とは、たんに自分の「気持ち」というよりも、さまざまな事象によって自身の内にもたらされる感覚の総体、身体や五官をまきこむ感覚の総体、その豊かさを指しているように思われます。桃紅の作品には、人間の感性的な体験のあらゆる局面が、凝縮して表現されているのです。

《道》2016、ザ・トールマン コレクション蔵

展覧会のみどころ

1．知られざる仕事の全貌を紹介
首都圏で初の回顧展として、篠田桃紅の仕事の全貌に迫ります。

2．繊細にして雄渾な作品の魅力
滲み、かすれ、濃淡…。墨が生む限りないニュアンス。作品の魅力を堪能できるまたとない機会です。

3．自由を求め、孤高を貫いた生き方にも注目！
自由と自立を求めて表現の世界に身を投じ、独自の抽象表現で生涯孤高を貫いたその生き方にも注目。

4．建築の巨匠たちとの協働
丹下健三らとコラボレーションした建築関連のしごとにも注目。

5．作品と作品との対話、作品と空間との響き会いに注目！
作品の魅力を、巧みな空間構成で際立たせます。

［篠田桃紅 略年譜］

1913 年　3 月 28 日、中国大連に生まれ、翌年父の転勤で東京に移る。
幼少より書に親しむ。
1940 年　銀座鳩居堂で初めての書の個展。伝統に縛られない自由な表現を志向するが「根なし草」と酷評される。
1945 年　敗戦後、病をえて二年間療養。
1947 年　この頃より文字に囚われない抽象的な作品を制作しはじめる。
1954 年　建築関連の最初の仕事として、サンパウロ市 400 年祭の日本政府館（設計・丹下健三）に壁書を制作。
ニューヨーク近代美術館「日本の書」展に出品。
1955 年　ベルギーの画家ピエール・アレシンスキーの映画「日本の書」撮影のために制作を実演。
1956 年　日本の前衛書と欧米の抽象絵画の響きあいに国際的な注目が集まるなか、単身渡米。主にニューヨークを拠点に 2 年にわたり活動、全米各地およびパリで個展を開催。
1958 年　帰国。大田区田園調布に居を構える。以後、日本の湿潤な風土が墨の特性を生かすことを再認識し、日本で制作して海外で精力的に発表しながら、独自の抽象表現に取り組んでいく。また多くの建築のために壁書、壁画、陶壁、緞帳などを手掛けていく。
1959 年「日本の伝統と革新：白隠・志功・桃紅・南谷 4 人展」（クレラー・ミューラー美術館、オランダ）。
1963 年　山梨県富士山麓にアトリエを構え、以後、毎年一定期間ここで制作。
1965 年　国立京都国際会館（設計: 大谷幸夫）のためにレリーフと壁画を制作。ベティ・パーソンズ画廊（ニューヨーク）で個展（以後複数回開催）。
1974 年　増上寺（東京）のために壁画と襖絵を制作。
1979 年「岡田・篠田・津高：20 世紀日本の抽象絵画 3 人のパイオニアたち」展 （フィリップス・コレクション、ワシントン D.C.ほか巡回）。
『墨いろ』で第 27 回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。
1992 年　回顧展「篠田桃紅 時のかたち」（岐阜県美術館）。
1996 年　個展「TOKO SHINODA VISUAL POETRY」展（シンガポール国立近代美術館）。
2003 年　関市立篠田桃紅美術空間開館。
2013 年　回顧展「篠田桃紅 百の譜」展（岐阜現代美術館、岐阜県立美術館ほか同時開催）。
「百の記念 篠田桃紅の墨象」展（菊池寛実記念 智美術館、東京）。
2021 年　東京都内で逝去。

篠田桃紅ポートレイト、1957 年、ニューヨークのスタジオにて
提供：公益財団法人岐阜現代美術財団

【篠田桃紅展 開催概要】

展覧会名：篠田桃紅展
会期：2022 年 4 月 16 日［土］― 6 月 22 日［水］＊59 日間
会場：東京オペラシティ アートギャラリー（ギャラリー1,2）
開館時間：11:00-19:00（入場は 18:30 まで）
休館日：月曜日（ただし 5 月 2 日は開館）
入場料：一般 1200［1000］円／大・高生 800［600］円／中学生以下無料

＊同時開催「収蔵品展 073 1960–80 年代の抽象」「project N 86 諏訪未知」の入場料を含みます。
＊［　］内は各種割引料金。障害者手帳をお持ちの方および付添 1 名は無料。割引の併用および入場料の払い戻しはできません。
＊新型コロナウイルス感染症対策およびご来館の際の注意事項は当館ウェブサイトをご確認ください。
＊最新の情報は随時当館ウェブサイト、SNS および特設サイトでお知らせします

主催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団
協賛：NTT 都市開発リート投資法人
特別協力：鍋屋バイテック会社、公益財団法人岐阜現代美術財団
お問い合わせ：050-5541-8600（ハローダイヤル）

■本展覧会に関するお問い合わせ
東京オペラシティ アートギャラリー　【企画】福士理　【広報】吉田明子、市川靖子
Tel：03-5353-0756 / Fax：03-5353-0776 / Email：ag-press@toccf.com